

第20回環太平洋産業連関分析学会年次大会 2009.11.1

全国九地域産業連関モデルによる交通システムの効果分析

慶應義塾大学 SFC研究所 柴田 つばさ 慶應義塾大学 小坂 弘行

[1] はじめに

本研究の目的と背景

研究の背景

高速交通インフラの整備の影響は、必ずしも地域経済にプラスに働くわけではない.

- 現代社会の複雑化に伴い、大都市と地方間の格差、大都市圏内での格差、大都市間の格差といった、交通インフラをめぐる様々な経済格差が、高速交通機関に関係する地域で起きている。
- 交通インフラ整備の効果の実態を正確に把握するためには、モデルによる分析・検証が必要となってくる.

研究の目的

■ 高度成長期からポストバブル期に至る日本経済における交通インフラの果たした役割を,全国9地域間産業連関モデルを用いて歴史的に検証する.

研究のアプローチと特徴

研究のアプローチ

1) 全国9地域間産業連関モデル

1965年から2000年の全国9地域間産業連関データを用いたモデルを構築する.

2) 交通効果の評価

全国9地域間産業連関データの各9地域に代表地点を設定し、その区間を高速鉄道・高速道路・航空の代表的路線を利用して移動した場合の交通の利便性を、所要時間と利用料金から評価する指数を独自に考案し、計測した。

3) 交通の全国9地域間産業連関モデル

計測した評価指数を用いて,交通に関連する変数 (後述)を説明することで,全国9地域産業連関モデ ルの中に組み込んだ.

研究の特徴

特徵 1)

1990年基準の接続全国9地域間産業連関表を作成. 5隔年8時点, 35年を網羅した時系列的, 歴史的な 分析ができる. 地域経済・産業構造変化の分析が 可能となる.

特徵 2)

過去の交通状況を忠実に考慮するために, 高速鉄道・高速道路・航空の代表的路線における区間移動の所要時間・利用料金について, 1965年から2000年までの35年分のJTB時刻表や道路時刻表から丹念に調べた.

特徵 3)

周辺地域とのアクセシビリティから、当該地域が受ける潜在的な影響を考慮した定式を行った.

[2] データについて

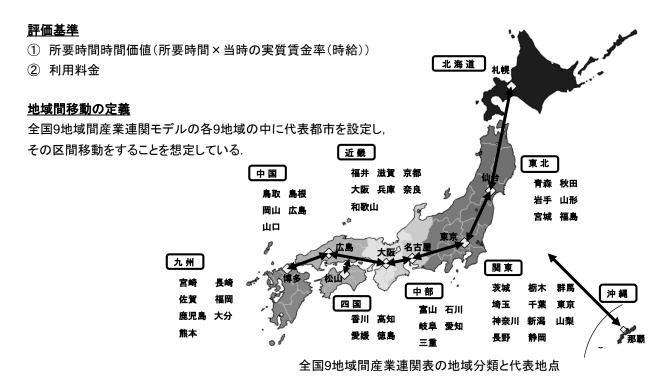
全国9地域間産業連関(1) ーデータの構成ー

				12.5			113724			
	投	入 地 域	北 海		東は	_	••••	沖	-	総
産			中間需要	最終需要	中間需要	最終需要	•••••	中間需要	最終需要	生
出地域			農鉱 金 林 属 製 進 進	民 政 間 消 費	農鉱 金 林 属 水 製 産業 造	民 政間消 消費		農鉱 金 林 属 水 製 産業 造	民間消費	産
北	中間投	農林水産鉱 業金属製造		横に見	る = 産出先(販売	を先)がわかる				
海	入	:								
道	付加価値	家計外消費 雇用者所得 :	推		で扱う9地域IO					
東北	中間投入	農林水産鉱業金属製造:	##に見る = 原: 	● 地域 1.北海; 6. 中国		分一 3. 関東 8. 九州		5. 近畿		
я с	付加価値	農 林 水 産 雇用者所得 :	材料の投入	① 農林	引分類一計8部	は業 ③	金属製造業			
:	:		原材料の投入構成がわかる	6 建設		所業•運輸第	直業 € 8 その他の♪	産業		
沖	中間投入	農林水産鉱 業金属製造		独立行	川実質生産額」	業研究所の	の産業連関表す 別デフレータを			
縄	付加価値	農林水産 雇用者所得								
総		生 産								4

全国9地域間産業連関データと交通評価指数との関係

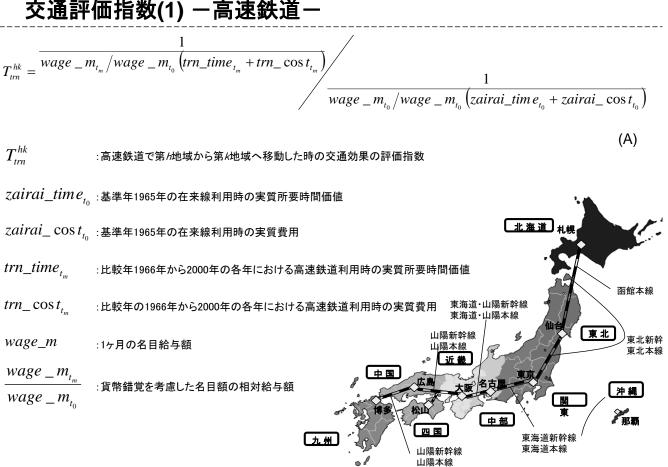
交通評価指数とは

高速鉄道・高速道路・航空の各高速交通の利便性を評価する指数。

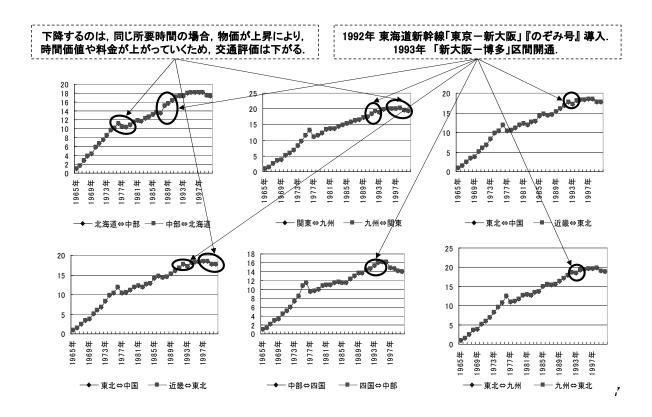


[2] データについて

交通評価指数(1) 一高速鉄道·

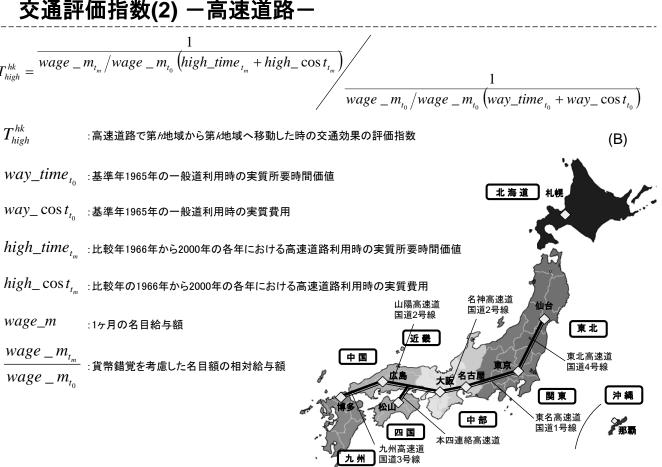


高速鉄道の交通効果の評価指数(一部抜粋)

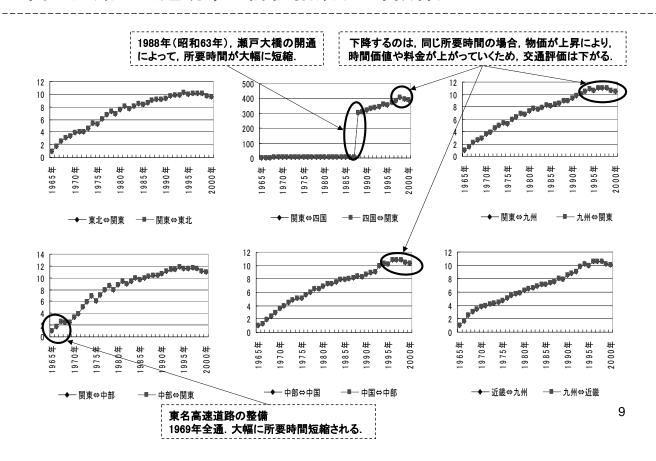


[2] データについて

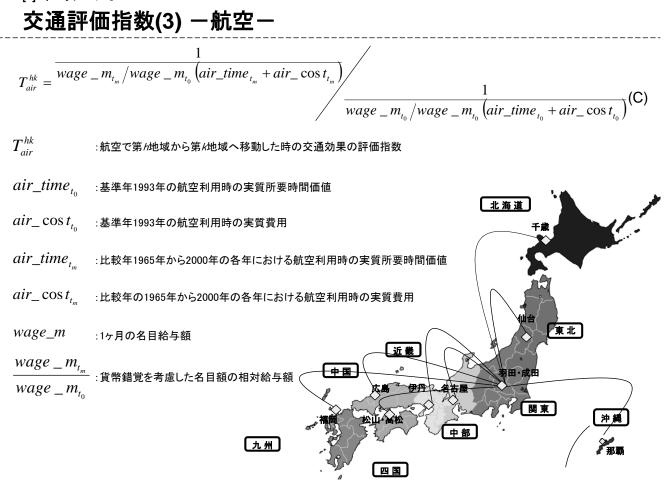
交通評価指数(2) 一高速道路



高速道路の交通効果の評価指数(一部抜粋)



[2] データについて



交通機関の代替性を考慮した評価指数

各々の交通機関には、相互に代替性が存在するので、それを以下のように定義する。

例)高速道路の交通評価指数が上がるとすると、 T_{hich}^{hk}

3つの交通機関の評価指数のうち、一つの指数が上がれば、他が下がる相互作用の仕組み、

11

ポテンシャル所得による消費モデル

$$\log(CPR_{i}^{hk}) = \alpha_{i} + \beta_{i} \log\left(\frac{WAGE^{k}}{p_{c}}\right) + \beta_{i,tm}^{hk} \log\left(\frac{\sum_{l \in S} TT_{im}^{lk} WAGE}{p_{c}}\right) + \beta_{i,high}^{hk} \log\left(\frac{\sum_{l \in S} TT_{high}^{lk} WAGE}{p_{c}}\right) + \beta_{i,air}^{hk} \log\left(\frac{\sum_{l \in S} TT_{iir}^{lk} WAGE}{p_{c}}\right) + \gamma_{i} \log\left(\frac{p_{i}}{p_{c}}\right)$$

$$(1)$$

周辺地域からの影響を考慮している. CPR_i^{hk} :第h地域第i建業の生産物に対する第k地域の民間消費 p_i :第i費目の価格

WAGE k:第k地域賃金

WAGE h:第h地域賃金

 $TT^{lk}_{trn},TT^{lk}_{high},TT^{lk}_{air}$:第 $extit{h}$ 地域の周辺地域の代替性を考慮した交通評価指数を合計したもの

⇒第/地域の民間消費は、周辺の複数地域の所得ポテンシャルから影響を受けるというメカニズム.

雇用のモデル

$$L_{j}^{k} = \beta \left(XXR_{j}^{k} \right)^{\beta} \left(\sum_{l \in S} TT_{trn}^{lk} \sum_{l \in S} TT_{high}^{lk} \sum_{l \in S} TT_{air}^{lk} \right)^{\delta_{ttrn}^{k}, high, air}$$
(2)

 $L^{^{k}}_{\;;\;}$:第 k 地域の第 $^{\prime}$ 産業の総雇用者数

⇒第k地域第j産業の雇用者数は、第k地域が周辺の複数地域からアクセスのしやすさで説明。

中間財交易係数のモデル

$$mx \quad {}^{hk}_{i} \quad = \quad \beta \, i \left(\left(T \, {}^{hk}_{high} \, \right) \, {}^{\beta \, {}^{hk}_{i \, , high}} \right) \tag{3}$$

 $m_{:}^{hk}$:交易係数 (第i財の第k地域での購入した財のうち、第h地域から来た財の割合)

12

⇒地域間交易, つまり, 物流は, 主に高速道路で行われているという意味.

総生産のモデル

$$\sum_{k=1}^{r} \sum_{j=1}^{n} m_{i}^{hk} a_{ij} X_{j}^{k} + F_{i}^{h} = X_{i}^{h}$$
 (4)

 a_{ii} :投入係数

 $F_{i}^{\;h}$:第h地域の第i財の最終需要

⇒第/地域, 第/産業の総生産は, 全国9地域間産業連関表の需要構造から上のように決定される.

産業別価格のモデル

$$p_{j} = \alpha_{j} + \beta_{j} \left(\frac{\sum_{k} WAGE_{j}^{k}}{\sum_{k} XXR_{j}^{k}} \right) + \gamma_{j} \left(\frac{\sum_{k} \sum_{i} \sum_{h} xvr_{ij}^{hk}}{\sum_{k} XXR_{j}^{k}} \right)$$
 (5)

 X_{ij}^{hk} :第h産業の第i産業から第k地域の第j産業への中間取引

⇒産業別価格は、投入された原材料・労働等の生産要素の費用構成によって決定される.

賃金率のモデル

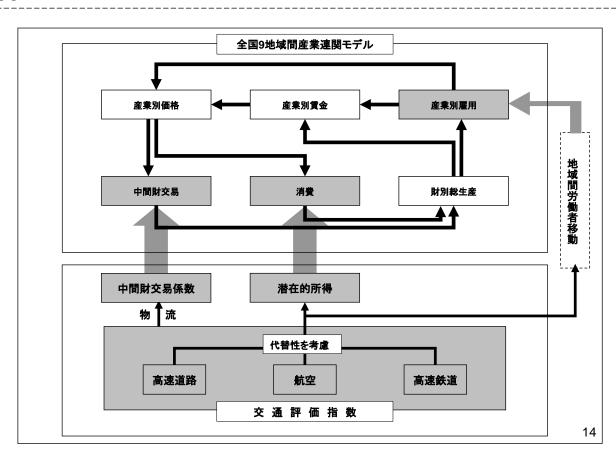
$$wage_{-}rate_{j}^{k} = \beta_{j}^{k} \left(\frac{XXR_{j}^{k}}{L_{j}^{k}}\right)^{\xi_{j}^{k}}$$
(6)

 $wage_rate_j^k$:第k地域の第j産業の就業者1人当たりの賃金率

13

⇒賃金率は、地域別・産業別の就業者の一人当たりの産出量、つまり、労働生産性で説明。

[3] 多部門モデルーモデルのフローチャートー



[4-1] 推計結果(パネル分析結果の一部抜粋)

- 第5部門その他の製造業の関東・第7部門商業・運輸業の九州-

Dependent Variable: LOG(CPR ? 5 KAN) Method: GLS (Cross Section Weights) Sample: 1965 2000

Included observations: 8 Total panel observations 48							
Variable	Coefficient	Std. Error	t-Statistic	Prob.			
LOG(WAGE_KAN/PC)	0.282141	0.329375	0.856595	0.3957			
LOG(P_5/PC)	-1.579617	0.739008	-2.137483	0.0374			
LOG((Z_HIGH_TOU_K	0.412801	0.248094	1.663891	0.1023			
Fixed Effects							
TOUC	1.115890						
CHBC	1.341797						
KINC	1.644634						
CHUC	0.437670						
SHIC	-0.295471						
KYUC	0.251791						
	Weighted S	Statistics					
R-squared	0.993922	Mean depen	dent var	14.05179			
Adjusted R-squared	0.992675	S.D. depend	lent var	3.199697			
S.E. of regression	0.273842	Sum square	d resid	2.924589			
Log likelihood	47.97140	F-statistic		3188.877			
Prob(F-statistic)	0.000000						
	Unweighted	Statistics					
R-squared	0.937698	Mean depen	dent var	12.88619			
Adjusted R-squared	0.924918	S.D. depend		1.010910			
S.E. of regression	0.277001	Sum square		2.992453			
-							

Dependent Variable: LOG(CPR_?_7_KYU) Method: GLS (Cross Section Weights)

Sample: 1965 2000 Included observations: 8 Total panel observations 48

Variable	Coefficient	Std. Error	t-Statistic	Prob.
LOG(WAGE KYU/PC)	0.905161	0.638760	1.417059	0.1627
LOG(P 7/PC)	-0.565442	3.072546	-0.184030	0.8547
LOG((Z_AIR_HOK_KY	0.459650	0.168728	2.724206	0.0089
DUM	3.429715	0.308803	11.10647	0.0000
Fixed Effects				
TOUC	-17.98573			
KANC	-14.93919			
CHBC	-16.36906			
KINC	-15.48176			
CHUC	-15.33208			
SHIC	-17.10318			
	Weighted S	Statistics		
R-squared	0.984672	Mean depen	dent var	10.85562
Adjusted R-squared	0.981041	S.D. depend	lent var	5.362354
S.E. of regression	0.738343	Sum square	d resid	20.71572
Log likelihood	13.36425	F-statistic		813.6968
Prob(F-statistic)	0.000000			
	Unweighted	Statistics		
R-squared	0.959468	Mean depen	dent var	9.331673
Adjusted R-squared	0.949868	S.D. depend		3.337058
S.É. of regression	0.747170	Sum square		21.21398
				7.5

15

[4-1] 推計結果(パネル分析結果の一部抜粋)

- 第3部門金属製造業・第5部門その他の製造業

Dependent Variable: LOG(WAGE_RATE_?_3)

Method: GLS (Cross Section Weights) Sample: 1965 2000

Included observations: 8 Total panel observations 64

Variable	Coefficient	Std. Error	t-Statistic	Prob.
LOG(PC) HOK-LOG(XXR_HOK_ TOU-LOG(XXR_TOU_ KAN-LOG(XXR_KAN_ CHB-LOG(XXR_CHB_ KIN-LOG(XXR_KIN_3/ CHU-LOG(XXR_SHI_3/ KYU-LOG(XXR_KYU_ Fixed Effects HOK-C TOU-C KAN-C CHB-C KIN-C CHU-C SHI-C KYU-C	1.407364 0.779998 0.831241 0.703399 0.703439 0.715010 0.747671 0.694158 0.773835 3.306608 3.222661 3.715776 3.759971 3.684968 3.286598 3.296598 3.597219 3.247883	0.058585 0.134743 0.085883 0.055680 0.052062 0.049042 0.037069 0.094904 0.185091	24.02242 5.788805 9.678771 12.63292 13.51158 14.57961 20.16953 7.314295 4.180840	0.0000 0.0000 0.0000 0.0000 0.0000 0.0000 0.0000 0.0000
	Weighted S	Statistics		
R-squared Adjusted R-squared S.E. of regression F-statistic	0.997206 0.996255 0.124711 2097.087	Mean dependent var S.D. dependent var Sum squared resid Prob(F-statistic)		6.058178 2.037951 0.730978 0.000000
	Unweighted	Statistics		
R-squared Adjusted R-squared S.E. of regression	djusted R-squared 0.980713		Mean dependent var S.D. dependent var Sum squared resid	

Dependent Variable: LOG(WAGE_RATE_?_5) Method: GLS (Cross Section Weights)

Sample: 1965 2000

Included observations: 8 Total panel observations 64

Variable	Coefficient	Std. Error	t-Statistic	Prob.
LOG(PC) HOK-LOG(XXR_HOK_ TOU-LOG(XXR_TOU_ KAN-LOG(XXR_KAN_ CHB-LOG(XXR_CHB_ KIN-LOG(XXR_CHB_ KIN-LOG(XXR_SH_5/ KYU-LOG(XXR_KYU_ Fixed Effects HOK-C TOU-C KAN-C CHB-C KIN-C CHU-C SHI-C KYU-C	1.217036 0.851383 0.968927 0.899116 0.904096 0.884972 0.881490 0.958508 0.978116 2.969792 2.756781 3.066459 3.076364 3.142255 2.880484 2.789290 2.738902	0.030491 0.033186 0.044377 0.025026 0.030144 0.035782 0.037932 0.039603 0.044473	39.91489 25.65498 21.83403 35.92770 29.99212 24.73250 23.23897 24.20300 21.99338	0.0000 0.0000 0.0000 0.0000 0.0000 0.0000 0.0000 0.0000
	Weighted S	Statistics		
R-squared Adjusted R-squared S.E. of regression F-statistic	0.999186 0.998909 0.052418 7213.949	Mean depen S.D. depend Sum square Prob(F-statis	ent var d resid	5.369774 1.587150 0.129139 0.000000
	Unweighted	Statistics		
R-squared 0.997467 Adjusted R-squared 0.996604 S.E. of regression 0.052468		S.D. dependent var 0.90		5.066393 0.900373 0.129387

[4-1] 推計結果(パネル分析結果の一部抜粋) **産業別価格**

Dependent Variable: P_? Method: GLS (Cross Section Weights) Sample: 1965 2000 Included observations: 8 Total panel observations 64									
Variable	Coefficient	Std. Error	t-Statistic	Prob.					
WAGE_?/XXR_? XVR_?/XXR_? Fixed Effects 1C 2C 3C 4C 5C 6C 7C 8C	2.809701 0.315423 0.514077 0.166047 0.321238 0.235939 0.296180 0.026396 -0.293428 -0.013266	0.127195 0.159089	22.08976 1.982679	0.0000 0.0513					
	Weighted S	Statistics							
R-squared Adjusted R-squared S.E. of regression F-statistic	0.971202 0.966403 0.119819 1821.160	Mean dependent var S.D. dependent var Sum squared resid Prob(F-statistic)		1.061196 0.653694 0.775256 0.000000					
	Unweighted	Statistics							
R-squared Adjusted R-squared S.E. of regression			lent var	0.837997 0.233736 0.783605					

17

[4-2] ファイナルテスト(一部抜粋) 地域別雇用一第7部門商業・運輸業ー

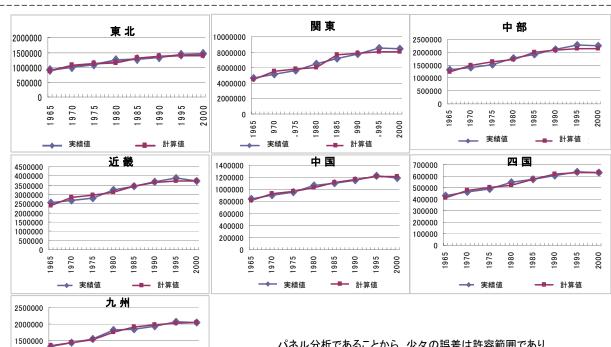
1000000 500000

1975

実績値

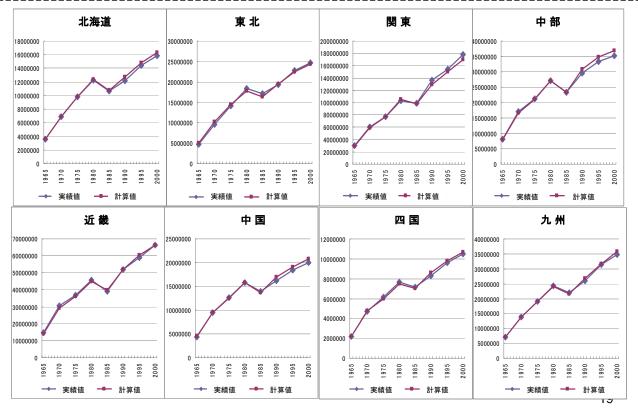
1995

━■ 計算値



パネル分析であることから、少々の誤差は許容範囲であり、概ね良いといえる.

[4-2] ファイナルテスト(一部抜粋) 地域別総生産一第8部門その他の産業ー



これらも、パネル分析であることから、少々の誤差は許容範囲であり、概ね良いといえる.

[5-1] シナリオ分析

高速交通インフラが高度成長期に果たした役割

3つの交通手段のインフラ整備が、基準年1965年の状況のままであった場合のシミュレーションを行う。

■ シナリオA: 航空がない.

■ シナリオB : 高速道路がない.

■ シナリオC : 新幹線がない.

■ シナリオD: 航空と高速道路がない.

■ シナリオE : 航空・新幹線がない.

■ シナリオF : 高速道路・新幹線がない.

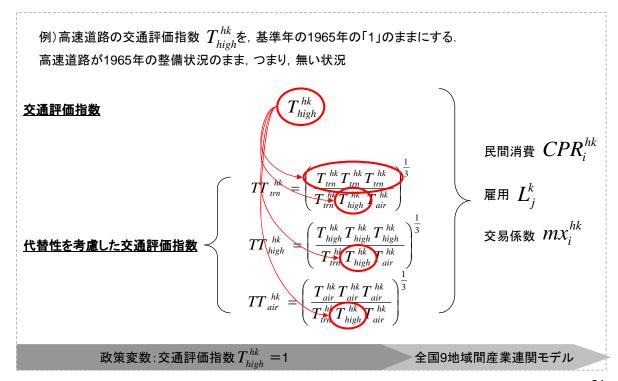
[表 . シナリオの種類]

	新幹線	高速道路	航空
標準解	0	0	0
シナリオA	0	0	×
シナリオB	0	×	0
シナリオC	×	0	0
シナリオD	0	×	×
シナリオE	×	0	×
シナリオF	×	×	0
シナリオG	×	×	×

■ シナリオG: 航空・高速道路・新幹線がない.

以上の7つのシナリオ分析を行う.

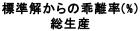
シナリオ分析のメカニズム

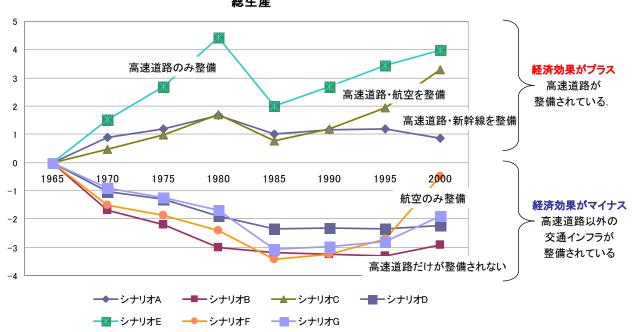


21

[5-2] シナリオ分析の結果(1)

日本経済全体に与える影響(総生産)





[5-2] シナリオ分析の結果(2)

地域経済に与える影響ージニ係数の比較ー

日本経済全体に及ぼす影響の背景にある地域経済の様相を見る. 交通インフラ整備が、地方経済の格差問題に、どのように関係しているのかをみるため、シナリオごとにジニ係数を計算し、比較する.

ジニ係数:完全平等なら0,完全不平等なら1. 数値が大きくなると不平等度が増す。

0.8 0.6 0.4 0.2 0 沖 四 北 東 中 九 中 近 関 東 道 第 北 国 州 部 畿 東 完全平等分布 ——不平等分布

1965年から2000年のジニ係数の平均値

ジニ係数	不平等度	新幹線	高速道路	航空	
シナリオA	0.5009		0	×	
シナリオC	0.5010	ltı ×	0	0	(前のスライドで)
標準解	0.5011	或 I	0	0	日本経済全体への効果が プラスのグループ
シナリオE	0.5016	ğ ×	0	×	
シナリオD	0.5026	7 0	×	×	(****
シナリオG	0.5028	E _ ×	×	×	(前のスライドで) - 日本経済全体への効果が
シナリオB	0.5031	0	×	0	マイナスのグループ
シナリオF	0.5032	×	×	0	

交通インフラ整備が全くされないシナリオGが、不平等度が最大でないのは、注目すべきである. 他地域間との**変**易が減ることにより、他地域へ物が流れるのを抑える力が働き、格差を拡大を阻止する傾向にあるのではないか?

[5-2] シナリオ分析の結果(3)

主要3地域の経済の分権化と集権化(総生産シェア)

関東・中部・近畿の3つの地域の総生産シェアに影響を与える交通インフラ整備

単位%	関東の総生産 シェア(昇順)		" " " " " " " " " " " " " " " " " " "		単位%	中部の総生原シェア(降順	
ジナリオA	56.989		シナリオA	17.263	Λ		
シナリオE	57.041	関	標準解	17.143	V		
シナリオC	57.156	関東経済 =	シナリオC	17.096	中部		
標準解	57.229	<i>の</i>	シナリオE	17.083	中部経済のシェア		
シナリオD	57.275	極集中	シナリオD	> 16.842	のシ		
シナリオG	57.603	中化	シナリオB	16.617	エア		
シナリオB	57.624		シナリオG	16.567	拡大		
シナリオF	57.731		シナリオE	> 16.495			

関東経済の一極集中を是正させるに は、高速道路を中心とした交通インフ ラ整備が有効であるといえる. 関東のシナリオの順位と、中部のシナリオの順位が重なることから、関東の経済の分散化が、中部の経済の発展につながることを示しているといえる.

単位%	近畿の総生産 シェア(降順)	
シナリオD	25.883	A
シナリオE	25.876	
シナリオG	25.830	近畿
シナリオF	25.774	経済
シナリオB	25.759	のシェア
シナリオA	25.748	ェア
シナリオC	25.747	拡大
標準解	25.628	

近畿の総生産シェアの拡大のためには、新 幹線整備が最も有効であると出た。しかし、 シナリオGが上位にあることから、近畿にとっ て、インフラ整備は、あまり好ましくないという 結果になった。

特に、標準解が最下位となった。つまり、現行の交通インフラ整備は、近畿にとって、最も経済シェアを低くする要因になっていることを意味する。これは、まさに、現在の近畿の地盤沈下の様相を示しているといえる2.4

[5-2] シナリオ分析の結果(4)

年平均地域別雇用量シェアの推移

関東は、現行の交通インフラ整備が最も好ましく、雇用量を増加させることができる

シナリオGが最下 位であることから, 全く整備されない と雇用者を引き寄 せることができない.

	関東	ī	近畿	<u> </u>	中部		
	標準解	41.269	シナリオE	19.133	シナリオC	11.745	
	ナリオB	41.033	シナリオC	19.116	アクカラ	11.733	
	シナリオC	40.973	シナリオF	19.093	レットリオA	11.730	
	シナリオF	40.757	シナリオG	19.086	シナリオE	11.730	
	シナリオA	40.565	シナリオA	19.055	シナリオF	11.646	
	シナリオD	40.370	標準解	19.040	シナリオG	11.644	
_	シナリオE	40.339	シナリオD	19.033	シナリオD	11.643	
	ナリオG	40.154	シナリオB	19.031	シナリオB	11.636	
						単位%	

	九州		東北		中国		四国	
	シナリオD	10.52	シナリオG	7.913	シナリオG	7.140	シナリオG	3.588
	シナリオA	10.492	シナリオD	7.881	シナリオF	7.047	シナリオD	3.538
	シナリオG	10.475	シナリオE	7.848	シナリオD	7.015	シナリオF	3.536
	シナリオE	10.440	シナリオA	7.816	シナリオE	7.007	シナリオE	3.504
	シナリオB	10.188	シナリオF	7.766	シナリオB	6.910	シナリオB	3.482
	シナリオF	10.154	シナリオB	7.720	シナリオC	6.904	シナリオA	3.454
<	標準解	10.151	シナリオC	7.690	シナリオA	6.887	シナリオC	3.453
	シナリオC	10.119	標準解	7.641	標準解	6.770	標準解	3 396
						_		<u>単位%</u>

シナリオGが最上位にあることから、他地域交易がなくなることが、地域内の雇用量を確保できるということが見て取れる.

雇用量の減少

地方における雇用者は、現行の 交通インフラ整備が行われると、 雇用量が減少してしまうことに なる.

25

[6] おわりに

結果についてのまとめ

- 1. 交通インフラの整備は、日本経済全体の総生産の底上げを実現させたが、地域別の経済 状況を見ると、必ずしも、良い影響をもたらしたとはいえないことが実証された.
- 2. これまでの交通インフラ整備は、関東の一極集中(特に東京)を助長させていたことが、明示された、地方にとっては、交通の利便性が増し、交易が盛んになることは、物・人が他地域へ流出する現象を加速させることになったことが、実際に見て取ることができた。
- 3. 交通インフラの中でも、高速道路が経済活動に与える影響は、非常に大きいことも、定量的に確かめることができた.
- 4. 以上の現象を踏まえ、地域経済の特質をより考慮した、交通インフラ整備のグランドデザインを計画してゆく必要が、今後、求められてくると言える.

今後の課題

- 1. 交通の利便性や効果を示す要素は他にも考えられる.
- 2. 他の政策評価などのシナリオ分析も考えられる.
- 3. モデルの精度を上げる。他の変数の内生化も考えられる.
- 4. 結果の吟味をより行う必要がある.
- 5. 先行研究の整理をより正確に行う.

27

参考文献

北村行伸(2005)『パネルデータ分析』 岩波書店

黒田昌裕(1984)『実証経済学入門』 日本評論社

小坂弘行(1994)『グローバル・システムのモデル分析-モデル分析の可能性への挑戦-』 有斐閣

佐々木公明・国久荘太郎(2007)『日本における地域間計量モデル分析の系譜-交通投資の社会経済効果 測定のために-』 東北大学出版会

佐々木公明・文世一(2000)『都市経済学の基礎』 有斐閣

戸澤正和・湯沢昭(2005)「ポテンシャルモデルを用いた地域構造の変化に関する一考察」第33回土木学会 関東支部技術研究発表会

藤川清史(2005)『産業連関分析入門』 日本評論社

藤川清史(1999)『グローバル経済の産業連関分析』 創文社

藤田昌久・アンソニー・J. ベナブルズ・ポール クルーグマン著, 小出博之 訳(2000)『空間経済学-都市・地域・国際貿易の新しい分析-』 東洋経済新報社

松原宏(2006)『経済地理学ー立地・地域・都市の理論』 東京大学出版会

山内弘隆・竹内健蔵(2007)『交通経済学』 有斐閣アルマ

山口誠・石川隆司(1997)「北関東自動車整備効果の計量経済学的分析—栃木県地域の分割モデルによる 地域経済への影響把握—」『地域学研究』 Vol.27, No.1, p.37-50.

松尾洋平(2008)「日本の地域別経済成長率を予測する試みー民間エコノミスト的アプローチによる地域経済論」JCER Review 66.